

アンセルムスによるカリタスの理解 —アウグスティヌスとの比較考察—

山崎裕子

St. Anselm's Understanding of *Caritas* : A Comparison with St. Augustine

Hiroko YAMAZAKI

Abstract

This paper compares St. Anselm's Understanding of *caritas* with that of St. Augustine.

Etymologically, the meaning of *caritas* and *dilectio* is derived from ἀγάπη, and *amor* is derived from φιλία.

Augustine uses these three words almost synonymously, but Anselm uses them in different ways. This paper analyses the way those words are used in Anselm's *Prayer for Friends*. In that text, *caritas* has three meanings : (1) love from God to men (2) love from men to God (3) love between men. When Anselm uses *dilectio*, it usually means (3) love between men. When he writes *caritas tua*, it means (1) love from God to men. And when he writes *caritas mea*, it means (2) love from men to God.

In this way Anselm gives *dilectio* and *caritas* slightly different meanings. He distinguishes them because of his strong consciousness of his own sin and God's grace.

序

カンタベリーのアンセルムス (Anselmus Cantuariensis, 1033–1109) は思想史上アウグスティヌス (Augustinus, 354–430) の影響を受けているが、悪ならびに罪の捉え方において両者には観点の相違があるように思われる。その具体例として、次の4点が挙げられよう。すなわち、①アウグスティヌスが罪、すなわち神からの離反について、「不変の善にそむいて可変の善に向かうこと (aversio voluntatis ab incommutabili bono, et conversio ad mutabilia bona)」と定義したのに対し、アンセルムスは「望むべきではないものへの指向 (conversio ad id quod non debet)」という見方により、aversioの表現を用いずに神からの離反を表わし得たこと⁽¹⁾、②知りつつ行った悪が罪であり知らずに行った悪は罪ではないとアウグスティヌスがみなすのに対し、アンセルムスは悪を「なすべきではないことを〔知らずにあるいは知りながら〕すること」と「なすべきことを〔知らずにあるいは知りながら〕しないこと」という分け方をして、アウグスティヌスのように「弱さの悪」(知りながら行う悪)と「無知の悪」(知らずに行う悪)に分けて考えないこと⁽²⁾、③上記②との関係で、

アンセルムスが悪を考察する際の基準は、「愛の規範にかなっているか否か」であること⁽³⁾、④秩序と悪の関係について、秩序の乱れや反秩序を悪とする点で両者は共通するが、アウグスティヌスが行為者（能動者）の意識を主として問題とし受け手がこうむる悪について言及しないのに対して、アンセルムスは行為の能動のみならず受動の観点も含めて秩序と悪の関係を考えている⁽⁴⁾、ということである。

それでは、愛が何らかの形でそこなわれた状態が罪であるとするキリスト教的倫理観において、罪に関する理解が異なるアンセルムスとアウグスティヌスは、罪がない状態である愛について異なる見解をしているのだろうか。本稿ではカリタスを中心に、両者の捉え方を比較考察したい。

I. カリタスとは何か

I-1. カリタスの語源

ラテン語“caritas（カリタス）”は形容詞 carus に由来し、愛や慈善事業のみならず高価であることや貴さをも意味する。英語では charity, フランス語では charité に該当する。現在チャリティは慈善事業の意味に受け取られることが多いが、本来的にはその意味に限定されるものではない。カリタスはキケロ（Marcus Tullius Cicero, B.C. 106–B.C. 43）やセネカ（Lucius Annaeus Seneca, B.C. 5–65）にもその用例が見られる⁽⁵⁾。しかし、ヒエロニムス（Hieronymus, 347–419/420）が新約聖書をギリシャ語からラテン語に翻訳した際に（ウルガタ聖書）、ἀγάπη（Agape, アガペー）を caritas と訳したことにより、カリタスのキリスト教的な意味が方向づけられたと言える。アガペーは、①神の人間に対する愛、②人間の神に対する愛、③人間同士の愛を意味する。アガペーがカリタスと訳され、カリタスはこれら3つの愛を意味内容として受け継いだ。

I-2. CARITAS, DILECTIO, AMOR

キリスト教で愛を意味するラテン語には、カリタス（caritas）のほかに、ディレクティオ（dilectio）とアモル（amor）がある。これら3つの言葉は一般に、どのように用いられるのだろうか。

カリタスが上述の如く形容詞に由来するのに対して、ディレクティオには diligere、アモルには amare という動詞が対応している。そして diligere はギリシャ語の動詞 ἀγαπᾶν（アガパーン）のラテン語に該当し、caritas に動詞形がないことから、diligere はカリタスの動詞形としても用いられる。他方、amare はギリシャ語の動詞 φιλεῖν（フィレイン）のラテン語に該当し、カリタスの概念を表現することはない⁽⁶⁾。動詞アガパーンには名詞アガペー（ἀγάπη）が対応し、動詞フィレインには名詞フィリア（φιλία）が対応する。ラテン語の diligere と amare に用い方の違いがあるように、ギリシャ語のアガパーンとフィレインも異なる使い方がされている。

新約聖書の中で、アガパーンとアガペーは合わせて257回出てくるのに対し、フィレインとフィリアは合わせて26回の使用で、名詞フィリアは一回のみ⁽⁷⁾用いられている。一般的に、アガペーが自分の利益を求めず相手のために尽くす無償の愛であるのに対し、フィリアは自然に湧き出てくる愛として理解される。新約聖書において、アガペーが多用されていることは、キリスト教にとってアガペーがいかに深い意義を持つかを示すことになろう。しかし、これらは日本語に訳すといずれも「愛する」という同じ言葉になってしまう。そこで、ギリシャ語／ラテン語でアガパーン／ディレゲレとフィレイン／アマレを使い分けている一例を、少し長くなるがラテン語の文章で見てみよう⁽⁸⁾。

Cum ergo prandissent, dicit Simoni Petro Iesus : Simon Iohannis, diligis¹ me plus his? Dicit ei : Etiam Domine, tu scis quia amo² te. Dicit ei : Pasce agnos meos.

Dicit ei iterum : Simon Iohannis, diligis³ me? Ait illi : Etiam Domine, tu scis quia amo⁴ te. Dicit ei : Pasce agnos meos.

Dicit tertio : Simon Iohannis, amas⁵ me? Contristatus est Petrus, quia dixit ei tertio, Amas me? et dicit ei : Domine, tu omnia scis : tu scis quia amo⁶ te. Dicit ei : Pasce oues meas.

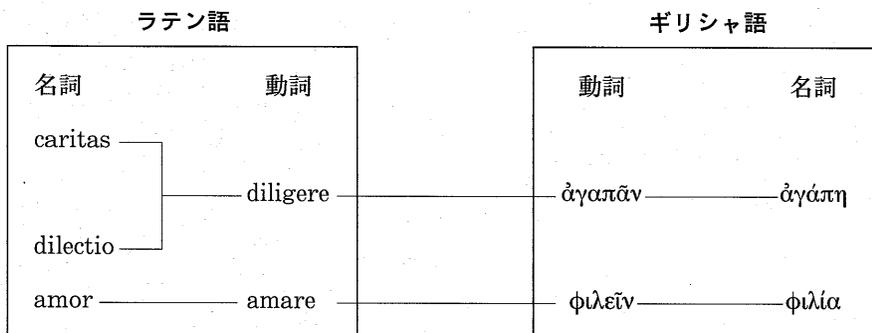
食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか¹」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛している²ことは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。

二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか³。」ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛している⁴ことは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。

三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか⁵。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛している⁶ことを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。……」

イエスはペトロに3回、イエスを愛しているかどうか尋ねる。「愛しているか」という質問の初めの2回にはディリゲレを用い、それに対してペトロは2回ともアマレを用いて「愛している」と答えている。そこでイエスは3度目の質問の時にディリゲレではなくアマレを用いて問うが、その時にもペトロはアマレで答えている。イエスはペトロにアガペーの意味で愛しているかどうか尋ねたにもかかわらず、ペトロがそれを理解せずにフィリアの意味の愛で受け答えたので、3度目には問う言葉を変えたと解釈することができる。この個所は、ギリシャ語ではディリゲレの代わりにアガパーン、アマレの代わりにフィレインの変換形が用いられている。

この章で述べたことを整理して図で示すと、次のようになる。



以上、キリスト教で愛を意味するラテン語であるカリタス、ディレクティオ、アモルの一般的な意味と関係について見てきたが、これらの言葉は思想家ごとに微妙に異なる使い方がされていると思われる。次にアウグスティヌスの使い方について検討してみよう。

II. アウグスティヌスにおける CARITAS, DILECTIO, AMOR

アウグスティヌスは、「Doctor caritatis (愛の博士)」と称される人物である。しかし、彼はカリタスに関する自説を体系的なカリタス論として展開してはおらず、また、カリタス、ディレクティオ、アモルそしてディリゲレ、アマレを使う際に特別の使い分けをせず、おおむね同じ意味でこれらの言葉を用いていると考えられる⁽⁹⁾。これはアウグスティヌス自身が言明していることである。『神の国』第14巻第7章第1節では、カリタスとアモルについて述べ、「人が神を愛し、かつ隣人を——人間に従ってではなく神に従って——自分自身のように愛することを決心した場合、その人は疑いもなくその愛のゆえに善い意志の人と呼ばれる。その愛は聖書ではふつう『カリタス』と呼ばれるが、同じ聖書の中で『アモル』とも言われている」⁽¹⁰⁾として、カリタスとアモルに違いがないことをアウグスティヌスは示唆する。そして、次のように述べて、アモルを悪い意味で受け取ることに對し異を唱える——「わたしがこれについて言及しようと思った理由は、ある人々がディレクティオとカリタスはアモルと意味が異なると考えているからである。実際、ある人々はディレクティオが善い意味での愛、アモルは悪い意味での愛をさすと言っている。けれども、世俗の作家たちでさえ、これらの語をそのような仕方を用いていないことはまったく確かである。ただし哲学者たちは、それが区別されるのではないか、また区別されるとすればどういう意味であるかと考えた。」⁽¹¹⁾ここで、ディレクティオ、カリタス、アモルの意味が異なると考えた「ある人々」として、オリゲネス (Origenes, 185頃—254頃)⁽¹²⁾とアンブロシウス (Ambrosius, 334—397)⁽¹³⁾の名を挙げることができる。これらの語を使い分けない「世俗の作家」とは、キケロ⁽¹⁴⁾やプリニウス (Gaius Plinius Secundus, 23—79)⁽¹⁵⁾のことである。

また、I—2で引用した『ヨハネによる福音書』からの文章についても、主がペトロに「わたしを愛するか」と尋ねるのに際してアマレを1回、ディリゲレを2回用いていることを挙げて、「わたしをディリゲレするか」と尋ねたのは、私を「アマレするか」と尋ねたのと同じことであるとし、アマレとディリゲレの意味の違いを認めていない⁽¹⁶⁾。

最も端的な表現がなされているのは、『カトリック教会の道徳』第1部の最後である。そこでは異なるラテン語によって「愛」という言葉が3回続けて用いられる。日本語では「愛、愛、愛のみによって」と訳される個所の原文は、“non……, nisi dilectione, amore, caritate”である⁽¹⁷⁾。ディレクティオ、アモル、カリタスを続けて書くことにより、これら3つの言葉が同義語であることを強調しているとみなすことができる。

とはいえ、アウグスティヌスはアモルについて曲がったアモルと正しいアモルを考えており、「愛 (アモル) はひん曲がっている場合、欲望ないし情欲と呼ばれる。正しい場合には愛情 (ディレクティオ) とか清い愛〔慈愛〕 (カリタス) と呼ばれる」⁽¹⁸⁾と述べている。したがって、ディレクティオとカリタスが同一であるのに対し、アモルの場合には、正しいアモルのみがディレクティオとカリタスの同義語とみなされる。

プレヒトケンによれば、アウグスティヌスの場合、アモル、カリタス、ディレクティオは概して同義語であり特別の違いはないが、『83の問題集』においてのみ、ある程度の相違から論を始めてい

る⁽¹⁹⁾。そこでは、アモルはある種の欲求 (appetitus quidam) と規定され、愛するに値するものへのアモルがカリタスまたはディレクティオと言われる⁽²⁰⁾。

この章で述べたことを図で示すと、次のようになる。

オリゲネス	}	caritas, dilectio ≠ amor
アンブロシウス		
アウグスティヌス		caritas = amor
		(De civ. Dei, 14, 7, 1)
		caritas = dilectio = amor
		(De mor. ecc. cath., I, 14, 24)
但し、次のような表現もある		
		amor rectus = dilectio
		= caritas
		(Enarr. in ps., 9, 15)
		amor = appetitus quidam
		amor rerum amandarum = caritas, dilectio
		(De div. quaest. 83, 35, 2)

III. アンセルムスによるカリタスの理解

III-1. アンセルムスにおける CARITAS, DILECTIO, AMOR

アンセルムスの場合アウグスティヌスと異なり、アンセルムスがカリタス、ディレクティオ、アモルをどのように理解していたのかという研究は、これまでなされていなかった。*Historisches Wörterbuch der Philosophie*で“Liebe”の項目を調べてみると、初期中世の個所で取り上げられる人物はベルナルドゥス (Bernardus Claraevallensis, 1090-1153)、ペトルス・アベラルドゥス (Petrus Abaelardus, 1079-1142)、サン＝ティエリのギョーム (Guillaume de Saint-Thierry ; Willelmus Sancti Theodorici, 1085頃-1148) の3人で、アウグスティヌスと上記3名の時代の間に位置する人物の名前は見当たらない⁽²¹⁾。しかし、第II章で見てきたように、カリタス、ディレクティオ、アモルは思想家ごとに微妙に異なる使われ方がされている。それ故、アウグスティヌスとアンセルムスの悪や罪の捉え方に観点の相違があるのであればなおのこと、愛に関する言葉の使い方を分析することは、アンセルムスが愛についてどのような捉え方をしていたのか理解を深めると同時に、悪についての捉え方の理解を深める一助ともなるはずである。

アンセルムスの用語索引によれば⁽²²⁾、カリタスとディレクティオは、様々な書簡の中で用いられている場合を除き、主として「祈り」の中で使われている。他方、アモルは「祈り」とならんで『モノロギオン』における使用頻度が高い。『モノロギオン』におけるカリタスとディレクティオを比較すると、カリタスの用例が caritatem という形での1例だけであるのに対して、ディレクティオの用例は dilectio, dilectione, dilectionem, dilectionis の形で合計9例ある。ところで、「友のための祈り」には、カリタスの用例が caritas, caritate, caritatem, caritatis の形で合わせて10例、ディレク

ティオの用例が dilectio, dilectionem, dilectionis の形で5例あり、他の著作に比べて、caritas と dilectio が均整のとれた形で使われている。そこで、「友のための祈り」を分析することによって、アンセルムスがカリタスをどのように理解していたのか考察していきたい。

Ⅲ-2. 愛の泉 (fons dilectionis)

「友のための祈り (Oratio pro amicis)」はアンセルムス書いた19の祈りの18番目に該当し、6段落52行からなる。「友のための祈り」の根底にあるのは、「互いに愛し合うように」ということである。アンセルムスは愛を探求し、次のように祈る。

Dilige ergo eos, tu fons dilectionis, qui praecipis et das mihi ut diligam eos. ⁽²³⁾

それゆえに、愛の泉であるあなた、彼らを愛するようにとあなたが命じ私にお与えになった人々を愛してください ⁽²⁴⁾。

「愛の泉であるあなた」とは神のことである。「彼らを愛するように」と神が与えた命令に対して、アンセルムスがなぜ、それを神が行うようにと神に対して請い願うのかについては別稿で述べたので ⁽²⁵⁾、省略する。ここで考えたいのはむしろ、「愛の泉」と言う時、なぜ“fons dilectionis”であって、“fons caritatis”ではないのかということである。その理由としては、可能性が2つある。アンセルムスが dilectio と caritas をアウグスティヌスと同様に同じ意味に解して、たまたま dilectio を用いているにすぎないのか、それとも、dilectio と caritas に意味上の違いがあると考えて意図的に dilectio を用いているのか、のいずれかである。

「友のための祈り」の中で、「愛」もしくは「愛する」という言葉は27回用いられている。そのうち、dilectio は5回、caritas は10回、dilectio と caritas 双方の動詞形である diligere (現在分詞を含む) は9回、amor は2回、動詞形 amare は1回で、合計27回となる。Dilectio の用例を挙げると、①「あなたの愛が私の心に特別にそしてより親密に彼らの愛を刻みつけたように……」(…… quorum dilectionem, sicut specialiter et familiarius cordi meo impressit amor tuus……) ⁽²⁶⁾ ②「あなたは彼らのために祈るように私にお命じになり、愛はそのようにすることを熱望しています」(Tu iubes me orare pro illis et dilectio concupiscit) ⁽²⁷⁾ などのように、神を介しての人間同士の愛に対して用いている。ここで言われる「彼ら」とは、友のことである。また、動詞 diligere の用例でも、「あなたのために私を愛する人と私があなたのうちにおいて愛する人々のために」(pro his qui me diligunt propter te et quos ego diligo in te) ⁽²⁸⁾ という場合、「あなた」である神を介しつつ、人間と人間の間の愛に用いている ⁽²⁹⁾。

これらのことから、fons dilectionis (愛の泉) は、人間同士の愛の究極の源、人間の間の愛をもたらすものとしての泉と考えられる。故に、もし fons caritatis とするならば、caritas には人間に対する神の愛の意味もあるので、神の愛の源という意味の可能性も出てくることになり、そぐわない。アンセルムスにおいて、dilectio は、caritas の意味内容の一部を担うと考えられていると言えよう。

Ⅲ-3. 「あなたのカリタス (caritas tua)」と「私のカリタス (caritas mea)」

では次に、アンセルムスがカリタスという言葉をもどのように用いているのかについて検討してみよう。「友のための祈り」において、caritas は10回使われている。そのうち各1回ずつ、「あなたのカリタス」「私のカリタス」という表現がある。

Bone domine, quo affectu recogitabo inaestimabilem caritatem tuam?⁽³⁰⁾

善良なる主よ、私はどのような思いであなたの計りがたい愛を熟考しているでしょうか。

Nimis tepida est, domine mi, nimis tepida est oratio mea, quia parum fervida est caritas mea.⁽³¹⁾

わが主よ、私の祈りは非常になま暖かいです。私の愛が燃え上がるには充分でないので、とてもなま暖かいです。

カリタスの意味にはⅠ－１で述べたように、①神の人間に対する愛 ②人間の神に対する愛 ③人間同士の愛が含まれる。Ⅲ－２で検討した dilectio は、カリタスの③に該当し、人間同士の愛を意味する。「あなたの愛」は、カリタスの①に該当する愛で、神の人間に対する愛を意味し、「私の愛」はカリタスの②に該当する愛で、人間の神に対する愛を意味する。カリタスに mea (私の) をつけて “caritas mea (私の愛)” とすることにより、②の意味でのカリタスであることがわかるようになる。

上記を踏まえて、Ⅲ－２で挙げた文章を再度検討してみよう。

Dilige¹ ergo eos, tu fons dilectionis, qui praecipis et das mihi ut diligam² eos.

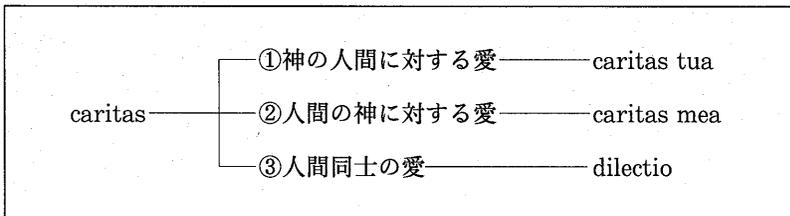
それゆえに、愛の泉であるあなた、彼らを愛する²ようにとあなたが命じ私にお与えになった人々を愛してください。¹

1の Dilige (愛してください) は、神が愛してくださるようにと願っているので、カリタスの①神の人間に対する愛を願っていることになり、この場合の diligere は名詞 caritas に還元される。他方、2の diligam (愛する) は、私が彼ら、すなわち友を愛するようにということなので、カリタスの③人間同士の愛を意味し、この場合の diligere は名詞 dilectio に還元される。このように、アンセルムスの場合、caritas と dilectio の2つの意味合いが、diligere という一つの動詞の中で使い分けられていると考えることができる。Dilectio は caritas に含まれるので、dilectio を用いず caritas と表現されることもあるが、dilectio を用いる場合には、より限定した使い方をしていくとみなすことができよう。

この章で述べたことを図で示すと、次のようになる。

カリタスの一般的意味

アンセルムスにおける表現



IV. 結語

アンセルムスとアウグスティヌスの「カリタス」の用い方を比較してみると、アウグスティヌスが amor, dilectio, caritas をほぼ同じ意味で用いているのに対し、アンセルムスは dilectio を caritas の一部として捉え、アウグスティヌスとは少し異なる使い方をしていると思われる。アウグスティヌスと比べて、dilectio をある意味で限定して理解しているとも言えよう。それは、人間同士の愛が人間みずからによる探求だけでは充分実行されず、人間の罪を神の愛がおおう⁽³²⁾ ことによって全うされることを、アンセルムスが強く意識していたことと関係しているのではないだろうか。それは、アンセルムスにとって、自分が罪びとであること、そしてそれにもかかわらず神が恵みを与えてくださることを、強く意識することでもあったのである。

—注—

- (1) 参照。山崎裕子「アンセルムスにおける悪の問題」『中世思想研究』第25号（中世哲学会編，1983年）124-134ページ。Hiroko Yamazaki, "Anselm and the Problem of Evil," *Anselm Studies 2* (=Proceedings of the Fifth International Saint Anselm Conference: St. Anselm and St. Augustine—Episcopi ad saecula), White Plains, New York 1988, pp.343-350.
- (2) 参照。山崎裕子「アンセルムスにおける悪の理解—アウグスティヌスとの比較考察—」『日本カトリック神学会誌』第9号（日本カトリック神学会編，1998年）80-92ページ。
- (3) 参照。山崎裕子「愛のひずみとしての悪—アンセルムスの『悪の哲学』—」稲垣良典編『教養の源泉をたずねて—古典との対話—』（創文社，2000年）65-79ページ。
- (4) 参照。山崎裕子「アンセルムスの秩序論」『中世哲学研究』第17号（京大中世哲学研究会編，1998年）18-25ページ。Hiroko Yamazaki, "Ordinis Pulchritudo and Evil in St. Anselm's *Cur Deus homo*," *Studia Anselmiana 128* (=CUR DEUS HOMO Atti del Congresso Anselmiano Internazionale 1998), Pontificio Ateneo S. Anselmo, Roma, 1999, pp.709-715.
(4) の論考では直接にアウグスティヌスとの比較を行っているわけではないが、比較考察した一般的な見方・考え方はアウグスティヌスの基本的な捉え方を含むものと思われる。
- (5) Cf. Hélène Pétré, *Caritas. Étude sur le vocabulaire latin de la Charité chrétienne du II^e au V^e siècle*, Louvain 1948, pp.30-40 et pp.40-42.
- (6) *Ibid.*, p.79.
- (7) 『ヤコブの手紙』第4章第4節。
- (8) 『ヨハネによる福音書』第21章第15節—第17節。邦訳は新共同訳聖書からの引用。
- (9) Josef Brechtken, *Augustinus Doctor Caritatis. Sein Liebesbegriff im Widerspruch von Eigennutz und Selbstloser Güte im Rahmen der antiken Glückseligkeits - Ethik*, Verlag Anton Hain, Meisenheim am Glan, 1975, S.48. Hélène Pétré, *op.cit.*, p.91 et p.96.
- (10) 泉治典訳『アウグスティヌス著作集第13巻「神の国」(3)』（教文館，1981年）224ページ (*De civitate Dei*, 14, 7, 1)。
- (11) 同書，225ページ。
- (12) オリゲネス『雅歌注解』序言。
- (13) アンブロシウス『ルカ福音書説教』10・176

- (14) キケロ『プルトゥスへ』1・1・1
- (15) プリニウス『自然誌』9・25
- (16) *De civitate Dei*, 14, 7, 1 (泉治典訳 前掲書, 224-225ページ)。
- (17) 「事実人間の最高善とは、それに一致する人を完全に幸福にするものにほかならないのである。そしてこのような善はただ神のみであり、われわれがこの神に一致しうるのは、たしかに、ただ、愛, 愛, 愛のみによってである。」熊谷賢二訳『カトリック教会の道徳』(創文社, 1963年) 52ページ。“Nam quid erit aliud optimum hominis, nisi cui inhaerere est beatissimum? Id autem est solus Deus, cui haerere certe non valemus, nisi dilectione, amore, caritate.” *De moribus ecclesiae catholicae*, I, 14, 24 (text : *Bibliothèque augustinienne*, vol.1, Paris, 1949²). 下線は引用者による (以下, 同様)。訳者は当該個所の注において, ディレクティオ, アモル, カリタスがそこでは同意語であることに言及し, この文章を日本語に訳すことが不可能であると述べている (同書132ページ)。
- (18) 『アウグスティヌス著作集第18巻 I 「詩編注解」(1)』引用個所は大島春子訳 (教文館, 1997年) 120ページ。“cum prauus est, uocatur cupiditas uel libido ; cum autem rectus, dilectio uel caritas.” *Enarrationes in Psalmos*, 9, 15.
- (19) Josef Brechtken, *op.cit.*, S. 48.
- (20) “Namque amor appetitus quidam est : …… Amor autem rerum amandarum, charitas uel dilectio melius dicitur.” *De diversis quaestionibus* 83, 35, 2 (*BA*, vol.10, Paris 1952, p.102 et p.104).
- (21) H. Kuhn / Red. K. H. Nusser, *Liebe. Historisches Wörterbuch der Philosophie, vol.5*, hrsg. von Joachim Ritter und Karlfried Gründer, Verlag Schwabe & Co. AG, Basel / Stuttgart 1980, SS. 299-301.
- (22) Gillian Rosemary Evans (ed.), *A Concordance to the Works of St. Anselm*, Kraus International Publications, White Plains, New York, 1984.
- (23) F. S. Schmitt (ed.), *S. Anselmi Opera Omnia* II, Stuttgart-Bad Cannstatt 1968, 72, 40-41.
- (24) 拙訳。「友のための祈り」の邦訳は, 次を参照。山崎裕子訳「アンセルムス『友のための祈り』『敵のための祈り』翻訳注解」, 『言語と文化』第9号 (文教大学言語文化研究所, 1997年) 127-35ページ。
- (25) 山崎裕子「アンセルムス『友のための祈り』と愛の探求」『宗教研究』第331号 (日本宗教学会編, 2002年3月) 掲載予定。
- (26) F. S. Schmitt, *op.cit.*, 72, 1-2.
- (27) *Ibid.*, 72, 32.
- (28) *Ibid.*, 72, 37-38.
- (29) Diligereは, dilectio と caritas 双方に対する動詞であるため, diligere を用いる文すべてが人間同士の愛の意味で用いられているわけではない。
- (30) F. S. Schmitt, *op.cit.*, 71, 9.
- (31) *Ibid.*, 72, 47-48.
- (32) Cf. *Ibid.*, 72, 34-36.

2001年10月
(国際学部教授)